

## ※ 1面 資料 ※

駒敏郎

## 『花と緑の記録』

## ― 府立植物園の五十年 ―

(『府政だより資料版』で連載・昭和四十六年五月〜四十七年五月・その最終号より)



…植物園はあくまで自然観察を中心とする府民の憩いの場であって、遊びの場ではない、というのが根本的な姿勢となった。だから、酒類の持ち込みはいっさい禁止。広い敷地だから売店の復活も考えられたが、売店を許すとせっかくの規制がなし崩しに崩されてしまうおそれがある、ということを取り止めになった。

入園料も無料にすべきだという声があったが、これは維持費というよりも、むしろ入園者の気持ちをチェックするものとして、大人五〇円子ども二五円に落ちついた。

現在の京都府立植物園の特徴は、そうしたはつきりとした姿勢の上に築かれた、典型的な総合植物園であるということだ。昭和四十六年に第一期四〇〇〇坪が完成した

「日本の森」は、その方針を一步進めたものである。

日本の、私たちの、文化を育てた植物たち、つまり私たちの生活と密着した自生植物を、全国からあつめてブロックごとに構成したもので、日本では初めての試みである。なかには、ごくふつうに見える何でもない野草や雑木もある。外国産の珍しい植物を知ることにも有益だが、民族をはぐくんだ草木をもう一度見直そうというのが、「日本の森」の構想となった。

昭和三十七年八月に四代目の園長となった麓さんは、欧米の植物園の視察旅行中に、各国の植物園が自国の植物を大切にしているのを見て、この着想をいだいた。郷土の草木を大切にしたい、そのために「ふるさとの森」といった小区画を作ってみたい、と考えたのである。この案を府庁に持って行くと、いっそう大きな構想になってはねかえってきた。「全国から郷土の草木をあつめて「日本の森」を作ってはどうか」そ

してそれについては資金のほうはケチケチするな、という蜷川知事のことばがついていた。

現在「日本の森」は、中央水流から東側の三角形の地域へ拡張されつつある。東の境界線に土盛りをして木を植えると、隣接する建物が隠れて、比叡山を借景にすることができ、完成すると二万坪あまりの「日本の森」が茂ることになる。

京都植物園の半世紀―それは日本にとつて、歴史はじまって以来の試練を経験した歳月だった。植物園もまた、国の運命とともにその激流に巻きこまれ、この園に青春の想い出を持った人びとのうちには、ふたたび還ってこない人も多い。

「花と緑の記録」は、その激動の季節を耐え抜いた人と植物との平和の詩であり、それはこれからも長く謳いつづけられねばならない。